

## あとがき

一九八〇年代から九〇年代にわたって日本で演じられた神々のドラマは、「根元への道」四部作としてまとめられ、光泉堂から発行されている。神界劇第一幕「日本の神々」は、根の国に落ちていた母神イザナミ（シラヤマヒメ）大神や、キクリヒメ大神といった神々が所属する白山神界の復活のためになされた神行が中心になっている。第二幕「子神たち」は、地球に落ちたクニトコタチ大神の復権のための神行、第三幕「宇宙開闢」は、物質地球の主であるオオクニヌシ大神の主権回復が中心になったものである。それらは神の仕組を人間が演じたドラマだが、その幕前編としての「道をもとめて」も、「根元への道」シリーズに加えられる。一人の人間が神界の役目を勤めるようになるまでの、苦難の道筋をたどったものである。これらはみな求道生活とのからみで描かれ、信じがたい内容のものだけれども、そのすべてが実話である。

神界劇には、第一部としてそれら三つの神行があつたのだが、神の仕組はそれで終わつたわけではなく、そこからさらに大きな舞台へと進展していった。人間感覚ではとてもとらえきれない大宇宙の奥へとわけ入って行くこととなった。われわれが住んでいるこの地球が舞台であつた神々のドラマは、太陽系が所属する

宇宙へと広がっていき、さらにはその宇宙をも越えた外宇宙、そしてその上のもっと大きな宇宙へと、どんどん伸び広がり奥まっついていって、ついには宇宙の究極までへと突き進んで、宇宙の秩序を変革するという、宇宙大革命へと発展していったのだった。

千年単位で演じられる神々のドラマは、その枠を大きく越えて、全宇宙を刷新するという、信じがたい大きな仕組へと進展していったわけであるが、神話に伝えられたドラマの本質を見きわめるためには、宇宙の深奥にまでわけ入る必要があつたし、その真相を説明するためには、宇宙の体制を変革しなければならぬという、驚くべき現実に基づくことになるのであつた。閉塞していた宇宙の、歪んだ秩序を刷新したいと願う革命的な神々によって、現在でも体制変革は成し続けられているが、そうした変化が地球人間世界の変動として現れている、ということも言っておかなければならぬだろう。

そうしたことの詳細を知りたいと思われる方は、本書の末尾に添えた光泉堂の出版物を参考にしていただきたい。本書だけでは、とてもその全貌をとらえることなど、できはしないからである。